

水蜘蛛 *Argyroneta aquatica* (Clerck) の採集

齋 藤 三 郎

(北海道帝國大學農學部動物學教室)

昭和五年(1930)岸田久吉氏が京都に於て吉澤覺文氏が雌雄一對の水蜘蛛を採集成體まで育成したことを報じた。以來我が領土から本種の發見を見ず一部の人々は吉澤氏の採集は人爲的分布に依りしものにあらずやの疑問を有するに至つた。數年前内田亨博士が厚岸の北大理學部附屬臨海實驗所附近の沼澤地に棲息する旨話されたが未だに其の地の採集機會なく現在に至つたが今夏石塚星郎理學士が同地の淡水浮游生物研究に際して内田教授の言により本種にも關心を持たれ幸にも成體の雌二個體を採集し生體の歸國學された。棲息數は多くない様であるが本種の北海道に分布することは明である。今後更に本邦領土から採集されることは豫期される。此の機會に別に新しい觀察も出來なかつたが本種に就いて記し今後の採集者の參考に供し度い。

分類位置 其の生活様式が獨特で従つて之に追從した形態を示す爲に兎角問題にされた様である。M. Walckenaer (1805) は水中生活者なる理由で, Ph. Bertkau (1878, 1882) は内部構造特に呼吸器官の構成から, T. Thorell (1836) は内外兩解剖的見地で *Argyronetidae* の創設を認容して居り J. Wagner (Fr. Dahl, 1904) は其の營巢型を *Drassidae* の營巢の一變型と見なし *Drassidae* に編入させてゐる。而し多くの其の他の人々の様に小形な胚葉 (*Symbium*) 及び生殖球 (*Bulb*) は *Tejenaria* への近縁を示し *Agelenidae* に編入するのが至當であらう。次の異名 (T. Thorell, 1870—1873) がある。

Araneus aquaticus Clerck, 1757

Aranea aquatica Linnaeus, 1758

Aranea urinatoria Poda, 1761

Aranea amphibibia Müll., 1776

形態 ♀ 背甲は光澤あり前頭部隆起し兩側扁平し褐色にして縁邊に濃褐色細

線を装ひ且濃色の一正中線あり。二列をなす八眼を有し兩列側眼は低い眼丘上に位置し互に相離る。上顎は強大にして圓錐形を呈し赤褐色にして先端開き前後兩牙堤に夫々 3, 2 の齒を具ふ。下顎又強大にして下唇上に弱く傾き褐色なり。下唇は下顎同様褐色にして三角形を呈するも先端圓し。胸板は褐色 心型にして長毛密生す。歩脚は淡褐色なるか又は濃褐色にして基節下面及び腿、膝、脛各節上面に黒色斑を装ふ。觸肢は細長にして彎曲せる小齒を有する爪を具へ基 轉 腿三節は黄色にして脛、跗兩節は褐色なり。腹部は卵形を呈し前端は後端より廣く且頭胸部の基部を覆ひ黒色長毛を密生し特に下面には長き黃褐色毛を密生す。上面前部に四小凹圓點あり。外部生殖器は横位の白色橢圓形にして其の兩極に黒斑あり。絲疣は單節にして淡褐色なり。單一氣管氣門は胃外溝直後に小開口として位置す。

♂ (J. Blackwall, 1861 に依る) : 色彩、形に於て雌と大差なくより大形なり。觸肢の基節は内側に屈曲し腿節は膝節より稍々長きもより細く脛節は長く且細く多毛なり。

各部測定(單位耗, J. Blackwall, 1861; W. Eösenberg, 1903; O. Herman, 1879; J. Leunis, 1886; E. Nielsen, 1932; E. Simon, 1875 に依り括弧内は厚岸産個體の測定を示す) 次の如し。

	全體長	第一步脚	第二步脚	第三步脚	第四步脚	頭胸部長	同 幅	腹部長	同 幅
♂	9.0-20.0	16.0-18.5	17.0	15.1-	15.5-19.0	7.0	4.9-		
♀	8.5-12.0 (8.5-9.0)	12.0-15.2 (12.0)	11.5-12.0 (11.5-12.0)	10.0-10.6 (10.0)	11.5-13.0 (12.5-14.0)	4.0-5.1 (4.0)	3.4-3.8 (3.5)	4.5-5.2 (4.5-5.0)	3.5-5.1 (3.5)

習性 飼育中全く陸上生活を行はない。ウメバチモの葉間に圓天井様の薄い網を作り水面近く浮び腹部を水面上に出し第四步脚及び腹部の長毛に氣泡を十分含ましめ更に第三步脚を氣泡に添へ他の歩脚で水を掻き先に作つた網に到達して氣泡を放散す。此の動作を繰り返し完全な潜水器を作る(第一圖)。住居中では下向きになり腹部を貯藏空氣中に入れ頭胸部と前二對の歩脚は水中に突き出して居るか又は脚を曲げて住居内の空氣中に完全に入り込んで居る。日中は巢の傍に他の動物が近寄らない限り静止し夜間に水草を傳つて活動す。最初適當な營巢場所を選ぶ爲か水草を傳つて這ひ回り此の際氣泡の爲(此の場合は第三、

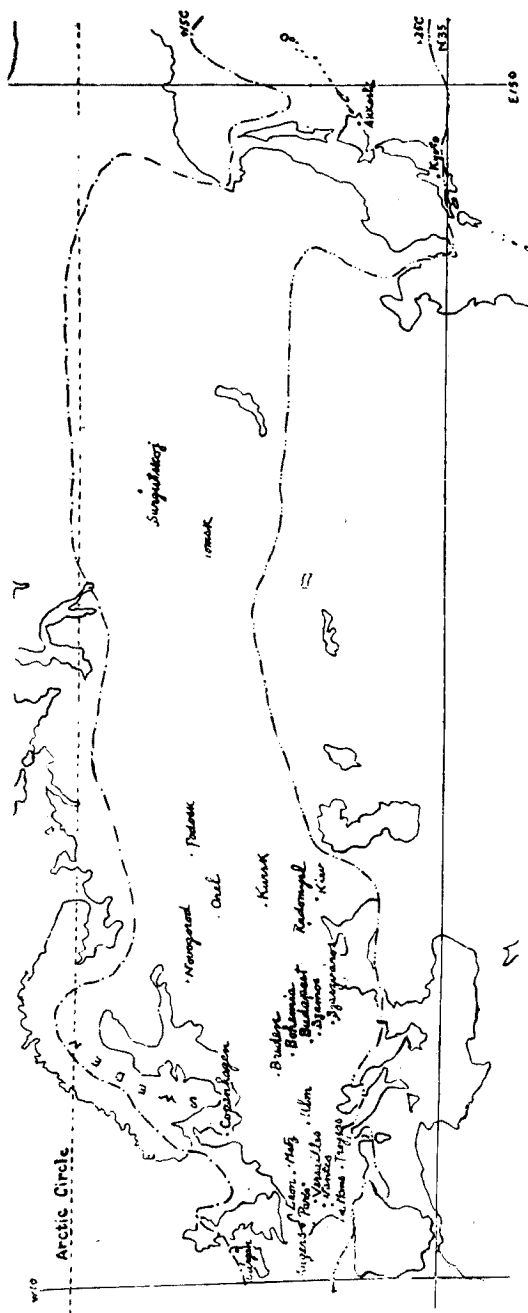


第一圖 水中住居内の蜘蛛 ウメ
パチモの葉間に営巢し腹部を営巢内に入
れ静止す。(約二倍)

四歩脚は氣泡に添へない) 蜘蛛は銀色に輝く。一度住居を作つても更に位置を變へて新に作る事もあり此の場合は前住居は其の儘放置される。先人(J. Blackwall, 1861; R. A. Ellis, 1903; K. Floerichke, 1919; E. Nielsen, 1932; E. Simon, 1875; C. Warburton, 1921) に依れば一定の生殖時期なく雄は小形の住居を作り次いで雌の住居との間に連絡を作り交尾を行ふ。卵は雌の住居の天井内面に白線で結着され略々三週間で孵化し仔蟲は更に略々二週間母蟲の住居内で生活すと云ふ。數年生存し夏期は水面近くに營巢し越冬に際しては深所に密に線を張り營巢し更に口を閉塞すると云はる。

分布 英國(J. Blackwall, 1861, 1882; Lurgan), 佛蘭

西(E. Simon, 1875; Paris, Versailles, Le Mans, Nantes, Angers, Leon, Troyes, Metz), 獨逸(W. Bösenberg, 1903, Fr. Roewer, E. Strand; Breden, Breslau, Ulm), 舊領洪牙利(O. Herman, 1879, C. Chyzer et L. Kulezynsky, 1897, G. Kolosvary, 1937, 1940; Budapest, Zsemér, Szamos), 丁抹(E. Nielsen, 1932), 舊領白耳義, 舊領羅馬尼(A. Nosek, 1895; Szaszváros), 瑞典, 歐露(D. E. Charitonov, 1926, 1935; Kiew, Kursk, Orel, Novogorod, Podolsk, Rodomysl, Tscherdyn), 舊領チエツコスロバキア(H. Zimmermann;



第二圖分布圖

Bohemia). 西比利亞 (L. Koch, 1879, T. Thorell, 1875; Tomsk, Surgustskoj) 及び日本 (吉澤, 1930, 1933; 京都, 石塚, 1941; 厚岸) 等北緯略々35度以北の歐亞溫帶地方から記録され其の南限は夏期平均氣溫攝氏27度の線に略々一致して居り北は15度を示す地域に限られる様で此の地域以外の佛蘭西南部 中央亞細亞又は蒙古からは記録されない。

撰筆するに當り石塚氏の御盡力並に内田教授の御厚意に對し厚く感謝す。

蜘蛛類研究報告 (3)

八 木 沼 健 夫

- 1 マメイタキセキグモ再び現る
- 2 ヤマシロオニグモの一新變種
- 3 ナミハグモ *Cybaeus mclottéi* (Simon) とカチドキグモ
Bansia nipponica Uyemura に對する再検討
- 4 臺灣産蛛蜘蛛類 (1)

マメイタキセキグモ再び現る

大阪府立生野中學校教諭菊地政雄氏が昭和16年8月18日兵庫縣花屋敷附近で採集された蜘蛛を同定中、珍品マメイタキセキグモを検出し同地を本邦最北の分布地として認め得たのである。本種は從來インド、セーロン方面に分布するものとされてゐた所、昭和7年愛媛縣に於て高橋幸雄氏が之を發見し始めて我國の Fauna に入籍したのである。概要は岸田氏に依つて動物學雜誌上に報告されてあるが、同年11月再び和歌山縣で植村氏が之を發見された。爾來茲に約10年、今回再び之が見出されたことは分布研究上刮目に値するものである。よつて第3の產地として報告すると共に その特徴、觀察事項を記し今後研究なさる諸彦の御參考に供したいと思ふ。始に當り貴重なる標本を戴いた菊地氏並に御教示を賜つた植村氏に深甚の謝意を表する。

昭和16年8月18日午前11時兵庫縣川邊郡川西町 (阪急電鐵寶塚線花屋敷驛附